保育所の保育士の役割の違いによる保育への影響について

The influence of Childcare Worker's role gives to childcare

大　村　　壮

キーワード：保育所、保育士、役割、保育
nursery teachers、nursery center、role、childcare

問題・目的

幼児期の子どもが日中を過ごす場として一般的には保育所と幼稚園がある。両者は基本的には異なる施設である。保育所保育指針によると「保育所は、児童福祉法第 39 条の規定に基づき、保育に欠ける子どもの保育を行い、その健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、入所する子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない」と規定されている。その一方、学校教育法第 22 条によると「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」とある。また幼稚園教育要領解説には「幼児期の教育は、大きく家庭と幼稚園で行われ、両者は連携し、連動して一人一人の育ちを促すことが大切である（p.18）」とある。もちろん保育所が教育を行なっていないということはないが、原理原則で考えるならば、保育所は生活の場であり、幼稚園は教育の場であるというのが主な違いとなるだろう。またそれぞれ保育士と幼稚園教諭がいる。それでは両者の違いは何だろうか。保育所保育指針によると「保育所における保育士は、児童福祉法第 18 条の 4 の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」とある。それに対して幼稚園教諭に関しては、幼稚園教育要領に次のように述べられている。「幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第 22 条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」とある。このように保育士は子どもの保育が業務の基本にあり、幼稚園教諭は幼児期の教育が業務の基本にあるといえる。ちなみに保育とは「保護し育てること」という意味になる。それに対して教育とは「ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること」という意味になる。このように保育所と幼稚園は基本的には違う目的や機能をもった施設であるし、保育士と幼稚園教諭も違う業務を担っている存在であるといえる。

しかし保育士と幼稚園教諭は違うにもかかわらず、同じ呼称で呼ばれることが多い。どちらも「先生」と呼ばれることが多い。この「先生」という呼称は、ある特定の職業を指すものではなく、何らかの敬意が込められた呼称であり、敬称ともいわれている。そしてさまざまな関係において用いられる。例えば医師は患者から先生と呼ばれ、教師は教え子から先生

と呼ばれる。こういった「先生」というのは役割の一つとされている。役割というのは、サービン（1956）によると、役割とは相互作用状況において、ある個人によって学習された行為の連鎖とされている。またゴフマン（1961b）は、役割とは、その役割にある者がその位置にある者に課せられる規範的な要請を遂行することが求められるものである。そして役割はある者単独で規定されるものではなく、あくまで社会的相互作用のなかで明らかになるものである（ミード，1934）。そのため、例えば「兄・姉」役割は「弟・妹」がいなければ成り立ちえないものであり、その逆もまた然りである。このように「兄・姉」であるためには、その者一人がいればいいのではなく、他者との相互作用が前提となるのである。ある役割にある者に要求される特質は、その位置の肩書と結びついてその者の自己イメージや周囲の人たちが抱くであろうイメージの基礎を提供することになる（ゴフマン , 1961b）。つまり先生は先生らしくするという自己イメージと周囲からのイメージが形成されることになるということである。ということは「先生」は生徒や幼児などの「教えられる者」が対になっており、また先生が先生らしくすると、教えられる者はより教えられる者らしくなっていくことになる（Figure1）。この関係が循環するなかで両者の役割はより固定的なものとなっていく。

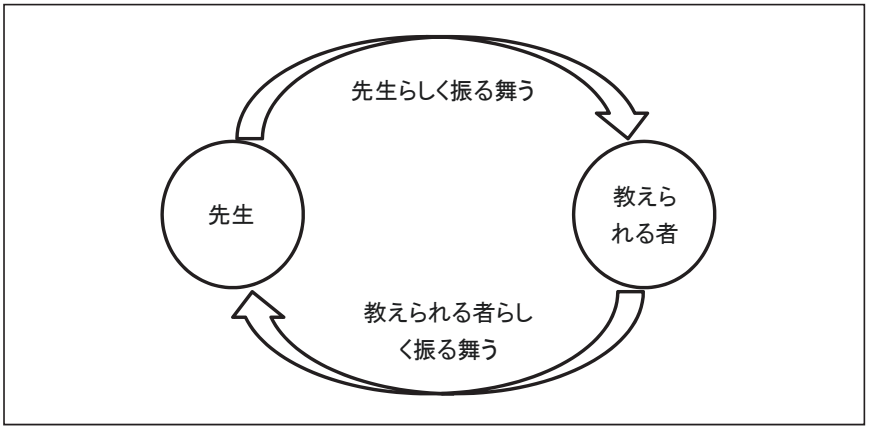

Figure1　関係性のなかで形成される役割

多くの保育所では保育士のことを子どもに「～先生」と呼ばせ、保育士同士もお互いのことを「～先生」と呼び合っている。その一方で保育士を「先生」と呼ばせていない保育所もある。そういった保育所では、保育士を子どもに「～ちゃん」や「～さん」と呼ばせたり、愛称で呼ばせたりしている。そして保育士同士もそのように呼び合っている。同僚や子どもから「～先生」と呼ばれるのと「～ちゃん」などと呼ばれるのでは何か違いがあるのではないだろうか。保育士は教諭ではないし、保育所も教育機関ではない。それにもかかわらず保育士について「先生」という呼称を使っている保育所では、そうではない保育所よりもより教育的・指導的な保育内容になっているのではないだろうか。そこで本研究では、保育実習Ⅱを終えたばかりの学生を対象に、保育所の保育士の呼称によって保育内容に違いがあるかどうかを検討することを目的とする。具体的には、学生に実習先の保育所の保育士の呼称、観察した保育士の保育内容に関する質問項目について答えてもらい、その結果から、保育士の呼称が「先生」となっている保育所とそれ以外の保育所の保育内容を比較検討する。

方　法

⑴　調査協力者

T 短期大学保育科の 2 年生のうち、保育実習Ⅱを選択した者 148 名のうち、私立保育所で実習した者 116 名。

⑵　手続き

後期最初の授業のなかでアンケートを実施した。実施時期は 2014 年 9 月である。

⑶　調査項目

実習先の保育所の保育士の呼称（子どもがいる場での保育士同士の呼称（以下、子不在時呼称）、幼児がいない場での保育士同士の呼称（以下、子眼前時呼称）、子どもからの保育士の呼称（以下、子からの呼称））、保育内容、そして子どもの様子についての 15 問の質問項目について（よくあった～全然なかったの 5 件法）。

結　果

⑴　保育士の呼称について

保育士の呼称について、子眼前時の呼称が「先生」である保育所と愛称などの「先生以外」の保育所の状況は以下の通りである（Table1）。

Table1　保育士の呼称について

呼称	人数
先生	62 (80.52)
先生以外	15 (19.48)
計	77(100.00)

( ) 内は %

また子眼前時呼称が「先生」である保育所でも、子不在時呼称が「先生以外」である保育所もある。そのため、子眼前時呼称が「先生」であるが、子不在時呼称が「先生」であるのと「先生以外」のところは以下の通りである（Table2）。

Table2　子不在時呼称の違いについて

子不在時呼称	人数
先生	50 (80.65)
先生以外	12 (19.35)
計	62(100.00)

( ) 内は %

⑵　保育内容の因子分析

保育内容について因子分析を行なった。その結果、複数の因子から高い負荷を受けている項目や 2 項目のみで因子を構成している項目などを削除し、再度因子分析を行ない、固有値 1.0 以上で因子負荷量が .50 以上のものを採用したところ、最適解を得た 2 因子が抽出された（Table3）。累積寄与率は 50.56% である。第 1 因子は、子どもの気持ちを受容したり寄り添っ

たりすることに関する項目や、保育士の考えを優先させることに関する項目から構成されているため、「子どもに寄り添う」と命名した。第２因子は、禁止の言動や指示の言動が見られることに関する項目や、指導に関する項目から構成されているため、「子どもを指導する」と命名した。またクロンバックのα係数を算出したところ、「子どもに寄り添う」因子が、.831、「子どもを指導する」因子が .771 であった。両因子ともに高い信頼性が確認された。

Table3　保育内容の因子分析

	Ⅰ	Ⅱ	共通性
因子Ⅰ：子どもに寄り添う　α =.831			
子どもを受容する関わりをしている	**-.792**	-.173	.657
子どものやりたい気持ちに寄り添うような保育をしている	**-.704**	-.301	.586
子どもに共感する関わりをしている	**-.695**	-.282	.563
子どもの気持ちより、保育士が子どもにやらせたいことを優先させている	**.548**	.356	.428
保育士の都合を優先させて保育内容を決めている	**.543**	.274	.369
因子Ⅱ：子どもを指導する　α =.771			
子どもに対して「～ダメ」といった禁止の言動がある	.154	**.700**	.514
子どもに対して「～しなさい」「～してはいけません」といった指導の言動がある	.294	**.686**	.557
子どもを指導しようという意識が強い	.318	**.522**	.373
子どもを褒めるより叱ることの方が多かった	.484	**.519**	.503
累積寄与率	29.40%	21.16%	

⑶　呼称による保育内容の違い

子眼前時に「先生」という呼称を用いているかどうかによって保育内容に違いが出るのかを比較するために、保育内容に関する２因子ごとにｔ検定を行なった。その結果、「子どもに寄り添う」因子では差が認められなかったが、「子どもを指導する」因子において有意差が認められた（Table4）。「子どもに寄り添う」因子では、「先生」群も「その他」群も平均値が低く、子どもの気持ちに寄り添うような保育内容であると考えられる。しかし、少し「先生」の方が平均値が高く、「その他」に比べると子どもの気持ちに寄り添わない傾向にあるが、有意差は認められなかった。それに対して「子どもを指導する」因子では、「先生」群も「その他」群も平均値はそれほど高くなく、それほど指導的な保育内容とはなっていないと考え

られるが、「先生」の方が平均値が高く、「その他」よりも子どもを指導するような保育内容が行なわれていることが明らかになった。

Table4　保育士の呼称による保育内容の比較

	先生	その他	t 値
「子どもに寄り添う」	1.88 (0.57)	1.71 (0.50)	1.39
「子どもを指導する」	2.53 (0.77)	2.01 (0.68)	3.17**

（　）内は標準偏差　** p ＜ .01

⑷　呼称による子どもの様子の違い

子からの呼称が「先生」となっているかどうかによって子どもの様子に違いがあるのかを検討するためにｔ検定を行なった。その結果、「降園時、家に帰りたがらない子どもがいる」という質問項目においてのみ有意差が認められた（Table5）。子どもが愛称などの「その他」の呼称で保育士を呼んでいる保育所の方が、「先生」の呼称で保育士を呼んでいる保育所よりも子どもが家に帰りたがらない様子が見られた。

Table5　子からの保育士の呼称による子どもの様子の比較

	先生	その他	t 値
登園を嫌がる子どもがいた	3.00 (1.11)	2.82 (1.18)	0.68
子どもの笑顔が見られた	4.96 (0.20)	5.00 (0.00)	-0.99
子ども同士のトラブルがあった	4.30 (0.73)	4.41 (0.67)	-0.63
子ども同士で仲良く遊んでいる姿が見られた	4.82 (0.44)	4.77 (0.43)	0.43
主活動の時間に落ち着きがなくなる子どもがいた	3.49 (0.94)	3.36 (1.26)	0.52
自分の作品を自慢する子どもがいた	4.01 (0.93)	4.05 (0.92)	-0.23
降園時、家に帰りたがらない子どもがいた	2.04 (1.10)	2.95 (1.36)	-3.33***
保育士の指示を聞かない子どもがいた	3.25 (0.95)	3.59 (0.85)	-1.55

（　）内は標準偏差　*** p ＜ .001

考　察

⑴　保育士の呼称と保育内容、子どもの様子について

本研究ではＴ短期大学保育科の学生のうち、保育実習Ⅱを選択して保育所に実習にいった学生を対象として、実習先の保育所の保育士の呼称や保育内容について比較検討した。その結果、今回の調査で明らかにった限りでは、子どもの目の前で保育士が互いに「先生」と呼び合っている保育所が約 80%、子どもの目の前で保育士が互いに愛称や「～ちゃん」といった先生以外の「その他」の呼び名で呼び合っている保育所が約 20% であった。なお、子どもの目の前で「先生」と呼び合っているが、子どもがいない場面では愛称など「その他」の呼び名で呼び合っている保育所もあり、それが 80% のなかの約 20% であった。保育所は生活機能を担った施設であり、教育機関ではない。しかしながら教育的な保育をまったくしていないわけでもない。保育所保育指針にも「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている（下線は引用者）」と保育所の役割が定められている。このように保育所といえども教育的な保育を担わなければならず、必然的に保育内容が「教える」といった指導的な部分も出てくると考えられる。そのため、保育士のことを「先生」と呼称することが自然なことと考えられ、約 80% の保育所では「先生」と呼称していると考えられる。その一方で愛称や「～さん」「～ちゃん」といった名前で呼び合う保育所では、保育所が幼稚園とは違う「生活の場」であることを考えていると思われる。保育所は保育に欠ける家庭に代わって子どもの保育をする施設であるが、通常、家庭のなかに「先生」はいない。家庭にいるのは父親や母親や祖父や祖母、またはきょうだいであろう。そういった保育所が「生活の場」であり、「家庭の代わり」である側面を重視し、保育士を「先生」と呼ばないのではないかと考えられる。

またこの「先生」という呼称を使わないということが、ゴフマン（1961b）の役割距離につながることであると考えられる。ゴフマン（1961b）は、役割概念を役割期待と役割距離に分けた。人々はその地位にあう役割を期待されるが、いつもしっかりとその期待に応えるわけではなく、その期待からズレた反応を示すことがある。そのように期待される役割から距離をとる反応を示すことなどを役割距離としている（船津，2000）。ゴフマン（1961b）の主張では、個々人が役割期待から距離をとることについて述べられているが、彼の役割期待と役割距離の概念は、本研究の保育所全体で保育士をどう呼称するのかの議論にも援用できると考えられる。そこでどうして「先生」という呼称を使用しない保育所があるのかについて、この役割期待と役割距離の概念から考察する。

保育士は子どもの教育も担っている存在である。子どもに教育を施しているという意味において、保育士も「先生」と呼ばれても違和感がないだろう。そのため約 80% の保育所では「先生」の呼称が使用されているのだろう。このように教育を施しているにも関わらず、「先生」という呼称を使わないということは、「先生」役割から一定の距離を取ろうとしていると考えられるだろう。つまり「先生」に期待される役割のなかに含まれるだろう子どもに教育や指導を施すといったことから一定の距離をとろうとしているため、わざわざ「先生」という呼称を使用しないと考えられる。つまり保育士が子どもに対して教育的、指導的な存在にならないように、「先生」という呼称を使用しないようにしているのではないかと考えられる。その証拠に、子どもの目の前で「先生」という呼称を使用している保育所と、愛称などの「そ

の他」の呼称を使用している保育所で保育内容にどのような違いがみられるのかを検討したところ、「子どもに寄り添う」側面に関しては有意差が認められなかった一方で、「子どもを指導する」側面に関しては有意差が認められ、「先生」を使用している保育所の方が、「その他」の呼称を使用している保育所よりも保育内容がより指導的であることが明らかになった。どちらの保育所でも、子どもの気持ちに寄り添ったり、子どもに共感したりするという保育を実践しており、大きな違いはなかった。これは一人ひとりの子どもに寄り添い、子どもを受容し、子どもに共感するといったことが保育において重要視されている（黒田 , 2009; 佐伯 , 2001, 2007）。こういった側面は、先生であろうとそうでなかろうと関係なく、子どもの保育をしていく上で必要なことであり違いが見られなかったのだと考えられる。それに対して「子どもを指導する」側面では違いが認められた。これはやはり「先生」役割を反映した結果だと考えられる。先生は役割上、教育や指導といったことが求められるだろう。それに対して愛称などで呼ばれる関係において、一方が他方を教育、指導することが求められるとはいえない。

そして役割は個人の特性ではなく、関係性を表した呼称である。そのため、保育する / される関係において、一方が「先生」となるならば、もう一方はそれに対応した位置をとることになる。同様に一方が愛称などで呼ばれるならば、もう一方もそれに対応した位置をとることになる。ゴフマン（1961a）は、精神病院において、患者が看護師の期待に応えてより患者らしくなっていく現象を指摘しているように、保育士が「先生」と呼ばれるのか、愛称で呼ばれるのかによって、子どもにも違いが出てくるのではないかと考えられる。その子どもの様子の違いを検討した結果、「降園時、家に帰りたがらない子どもがいた」においてのみ、有意差が認められた。これは愛称などで呼び合っている保育所の方が先生で呼び合っている保育所よりも保育内容が指導的ではなく、子ども自身も自分を出して過ごせるために帰りの時間になっても家に帰りたがらないのではないかと考えられる。しかしそれ以外の質問項目では有意差は確認されず、保育士の役割の違いが子どもの様子に与える影響はそれほど大きくないと考えられる。

⑵　まとめと今後の課題

本研究では、学生を対象に、実習先の保育所の様子についてアンケート調査を実施し、そこから保育士の呼称と役割の関係、並びに保育内容や子どもの様子への影響について検討した。得られた結果は示唆に富むものであったが、課題も多い。本研究では、保育士の役割に注目し、保育士が「先生」役割を担うほど保育は指導的なものになり、子どもは保育所でもっと遊びたいとは思わなくなるという関係が見出せた。しかしこの結果はあくまで学生の視点から見えてくる保育であり、実際になされている保育とは異なる可能性があることは注意が必要であろう。調査に協力してくれた学生は、保育実習Ⅰで 2 週間の保育所実習を終了し、教育実習で 4 週間の幼稚園実習を終了している。また 1 年半にわたり保育の勉強をしてきた学生である。そのため、それなりに当該保育所の保育を観察することはできると考えられたため、調査に協力を求めたのだが、彼女たちはあくまで学生であり、まだ保育者のタマゴでしかないため、その点は本研究の大きな課題である。そして今後の課題は、保育士の役割を各保育所がどのように認識しているのか、どういった狙いをもって愛称などで呼び合うようにしているのかなどについて調査することが必要だろう。また、幼稚園でも本研究で言及し

た子眼前時の呼称と子不在時の呼称がズレているところがあるのではないだろうか。保育所とは違い、幼稚園で教諭のことを愛称などで呼ぶところはないかもしれないが、子どもがいるときといないときで役割との距離の取り方が異なるのではないか。そしてそれが何らかの保育実践に影響を与えているかもしれない。今後はその辺りについても調査していきたい。

文　献

船津衛 2000 ジョージ・H・ミード : 社会的自我論の展開 . 東信堂 .

Goffman, E. 1961a Asylums: essays on the social situation of mental patients and other inmates. Doubleday & Company, Inc. (石黒毅 (訳) 1984 アサイラム : 施設被収容者の日常世界 . 誠信書房)

Goffman, E. 1961b Encounters: two studies in the sociology of interaction. The Bobbs-Merrill Company, Inc. (佐藤毅•折橋徹彦 (訳) 1985 出会い: 相互作用の社会学. 誠信書房)

黒田秀樹 2009 今、保育者に求められていること 子どもと親に寄り添う保育者の専門性 . 発達 , 118, 9-15.

厚生労働省 2008 保育所保育指針 フレーベル .

Mead, G.H. 1934 Mind, Self, and Society, ed. C.W. Morris, University of Chicago. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) 1973 精神・自我・社会 . 青木書店)

佐伯胖 2001 幼児教育へのいざない : 円熟した保育者になるために . 東京大学出版会 .

佐伯胖 2007 共感 : 育ち合う保育のなかで . ミネルヴァ書房 .

Sarbin, T.R. Role Theory. University of California. (土方文一郎 (訳) 1956 役割（ロール）の理論 . みすず書房)